

★講演★

行動の意味の理解

イーデイス・フェルメール

司会・翻訳 津守 真

(これは、昭和五十二年五月にお茶の水女子大学及び東京大学でなされた特別講義です)

司会者 オランダの心理学者で、ユトレヒト大学の教授であるドクター・フェルメール先生を御紹介いたします。

この先生は必ずしも幼児教育が専門というわけではなくて、むしろ心理臨床を専門としておられる方です。ただ実際の子どもをあつかうという点では共通であります。

この先生の立場は現象学です。私は子どもの実践を見るときには現象学的な見方はひじょうに重要だと思っています。そういう点で私共と共通の哲学的地盤を見つけていただけるのではないかと思います。

フェルメール 私は、今日、皆さんに、子どもと親との間にあって相互に理解できないでいる問題についてお話ししようと思います。第一に、子どもたちが成長するにつれて、親は、彼らが社会の中に入り、社

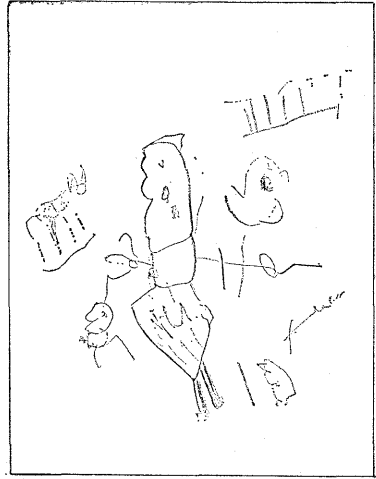


写真 1 a

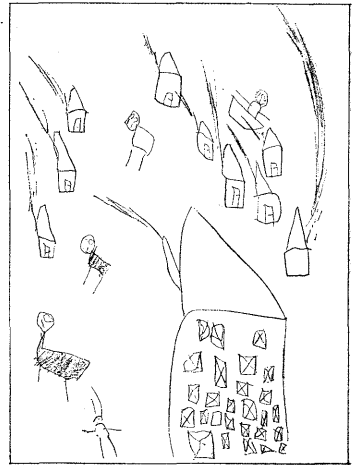


写真 1 b

会に直面できるようにすることを望みます。しかし、すべての子どもが、親が望むように、社会を受けいれることができるわけではありません。しばしば、子どもたちは、自分自身をよく説明することができません。それは、子どもたちがそれを説明することはをもたないからではなく、彼ら自身何が困難なのかを分らないからです。親と子は共に住み、子どもはそこで成長し、親は子どもが社会に入ってゆくのに助けになりたいと願いながら、彼らの間にはしば

しば誤解が生れます。親は子どもの中に何が起っているのか分らず、子どもは何が問題であるのか自分でも理解できず、しばしば問題行動となつてあらわれます。そこで分るように、行動は意味なきものではありません。子どもは問題行動によって意味を示そうとしますが、子どもはそれを説明できず、親は理解することができません。専門家は、その理解のために、しばしばいろいろな心理テストや調査を行います。専門家はその科学的な意味を知っていますが、

たとえばIQを例にとつてみても、IQの結果を親に示したところで、そのことは親の心の中では動いてはたつきません。子どもが表現したものを私どもが見たところから、その意味を親に伝え、またそのことを子どもも自分自身で理解することが重要なのです。心理学的な調査や検査自体の科学的な部分は、親や子どもには意味をもたないでしょう。

まず最初に絵をみて頂きます。この絵は

子どもが自分自身を表現するものとして理解することが大切です。まず、第一には年齢によって表現されるものがちがいます。

第二にはそれぞれの子どものパーソナリティによっても表現がちがいます。パーソナリティは絵の中に投射され、子どもは自身自身を絵の中に表現します。たとえば写真1a、1b、の絵は四歳の子どもの描いたものですが、何らベースラインをもっていません。ベースラインというのは、その絵の基準になる線のことです。これは方向な

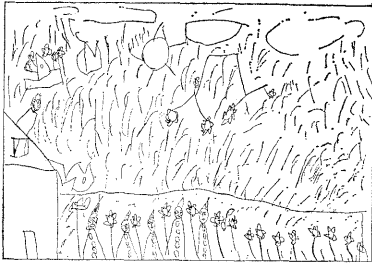


写真 2

した、あちこちに浮かんでいます。つまり子どもは、自分自身を表現するのに動きそのものによって、表現しています。だから、たとえばこの絵を見た時にこの子どもがおくれているというふうに見たらこれはナンセンスです。おくれているという現実（リアリティ）と、描いている絵とは全然ちがう世界に属するものであって、そのちがう世界に属するものを二つ結びあわせて考えようとしても、これはナンセンスです。

写真2は五歳の子どもの絵です。五歳の

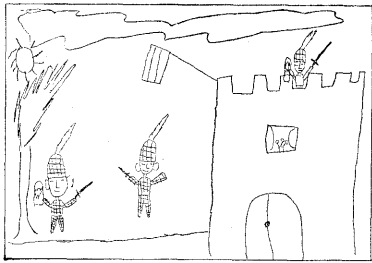


写真 3

子どもはこうして一応ベースラインにそって描きますが、それをまたひっくりかえして別のベースラインにそって描きます。このように必ずしもベースラインが固定していません。この年齢の子どもは二次元の中にあらわさないのです。それに対して写真

3の七歳の子どもはもちろんきんぎょとした二次元空間の中に全てのものをおさめて描いています。これをもし十歳の子どもが描いたとしたら「ああこれはちょっとおかしい」という人があるかもしれないけれど

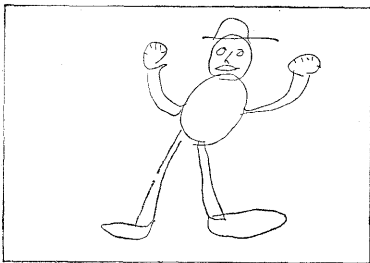


写真 4

も、そのことは決してこの絵を説明することにはならないでしょう。

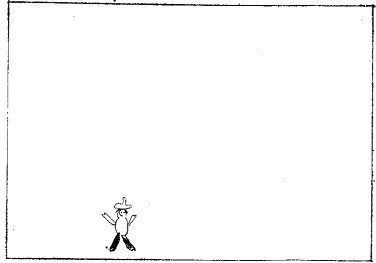


写真 5

写真4と5を見て下さい。これはいかにパーソナリティが絵の中に表現されるかということの例としてだしてみました。写真4の大きな子どもと、写真5の小さくかかれた子どもと並べてみただけで、これをおいた子どもは、ちがう個性だということがわかるでしょう。写真6の絵は写真5と同じ子どもが二週間後に描いたものです。これは金属をからだにまいて、力強くみえま

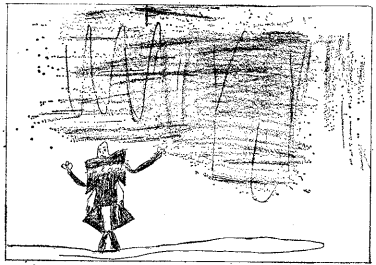


写真 6

す。この間におけるこの子どもの変化を見ることができるといえるでしょう。これらの絵は例としてただただで、今日は時間もありませんので、これ以上これについて説明するのはやめておきます。

写真7は八歳の子どもが描いたものです。だんだん年長になれば細部を描くし、もっと現実的な絵を描くようになりますが、この子どもは写真にみるように、非現実的な絵をかいています。この子どもは特殊学級に行っています。特殊学級に行つて

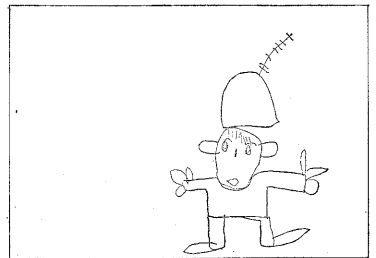


写真 7

ることを知ってこれを見るとまたよくわかる場所があるでしょう。しかし逆に、この絵をみて、「ああ、この子はこんな絵をかくから知能が遅れている」と、こういうふうに見たらこれは理解することになりません。特殊学級に行っているということを知ってこれを見ると、理解するところは大きいのですけれども、その逆はそうではありません。

写真8はみなさん知っておられるようにコッホの樹木テスト(バウムテスト)による

ものです。コッホは樹木をこういうふう
に描くと、その子どもはこういう性質だとい
うようなことも言っていますが、私はその
ような見解からは、やや距離があります。
しかし子どもはこういう樹木をかくことに
よって自分自身の何かを表現していること
は確かです。「こういう樹木をかく子はこ
ういう性格だ」というよりも、もっと多く
のものを子どもは一枚の絵に表現していま
す。私は絵をそういうふうに見ています。

ユングは神話類型（アーキタイプ）とい

うことを言っていますが皆さんご存知でし
ようか。フロイトやユングによればわれわ
れはみな意識の世界だけで生きているので
はなく、無意識の世界をもっています。
われわれが表現するものは、意識のレベル
の上にとどまりません。無意識が大きな
たらきをしますが、これは言語に表出され
ません。さらにもう一歩奥に行くとユング
のいうアーキタイプという無意識のところ
に到達します。たとえば、父、母という場
合に、それはあなたがたや私の父、母とい

う特定の父母を指すだけではなくて、父、
母という共通の理解があります。人間の心
の中にある共通の父親像・母親像は、昔か
らの伝説やおとぎばなしなどにもあらわれ
ます。ユングはこういう共通無意識、集合
無意識ということを行っています。

写真8に見るような樹木の絵と人間の心
とはアナログで結ばれていると言ってい
いでしょ。これは決して論理的な結びつ
きではありません。無意識の世界というの
は論理的な結び方をしていないのでアナロ

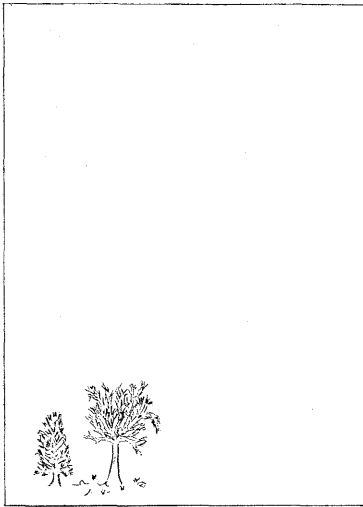


写真 8

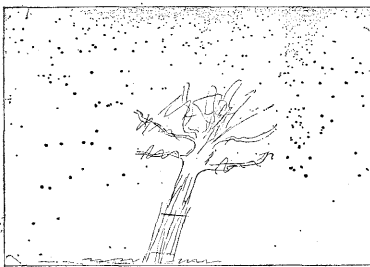


写真 9

ギーで知られるだけです。だから樹木テストを論理的な方法で扱って、こういう性格をもった人はこういう樹木を描くというような結びつけをすると、間違ったことになります。

樹木テストでは、樹木のイメージと人間自身のイメージとがアナロギーで結ばれていると言ってもよいでしょう。人が地面の上に立つとき、足元から根がはえている気もするし、また、木の板のように手を張ってのびあがるような気持になるかもしれない。こういう自分自身を木になぞらえるのは論理的に考えればおかしなことです。これはイメージのアナロギーで結ばれているわけで、こういう意味でコッホの樹木テスト(バウムテスト)というのはアーキタイプに属する問題なのです。

写真9を見て下さい。この少年は学習不振児といわれた少年で、勉強する気をあまり持っていないません。けれども、知能テスト

をやるとIQはかなりよい子どもです。親がこの子をクリックに連れてきました。午前中、この子に木をかくてみないかとやって描いたのが写真の絵です。この木の特徴は垣根が下の方にあつて、それから枝には葉っぱが非常に薄い書き方でなげやりなやり方で描かれている点です。この子は確かに学業にも無関心です。同じようにこの子が葉っぱをかくときに無関心なやり方で描いています。こういう風にかく子どもの世界を考えてみると、それは子どもは自身自身に対しても無関心であり低い自己評価をしているのではないかと思われれます。

午後になってからもっと他の方法で自身を表現させたいと思い、この子どもにプレイルームで砂遊び(サンドプレイ)をやってもらいました。そうしたらこの子は午前中とはちがつて、私が「あなたはずいぶん分岐のないのをつくれますね」と言ったところ、得意になって、いろいろなものを作

りはじめました。そうして作ったのが、カルタゴの英雄ハンニバルがアルプス越えをする場面です。午前中の樹木の絵とくらべると、ちがった心の状態を自分であらわしているということがわかります。箱庭でそういう場面を作ってひじょうに楽しそうにみえたので、両親を呼んで、「こんなものを作りました」と言ってみせたのですが、両親は「かなりいいのができたな」なんていう程度で、あんまりたいした積極的な態度を示さないのです。それで、こういうことを考えると、いかにイメージの中にあるものを翻訳して現実世界のことばにするところがむずかしいかということがわかります。また子どもがこうやって描いたり作ったりするものは現実の世界とは一歩ちがったところでやっているのだから、専門化はそれを翻訳して現実世界にわかるようになってくるのが一番大きな問題なのではないかと私は思っています。

次の例に移る前に、想像が未知なる無意識の中から出てくることについて、現象学的な考え方についても少し説明を加えましょう。現象学者メルロポンティの身体の眼（ボディアイ）のことを述べたいと思いますが、フロイトの論を横の水平線とする、メルロポンティの論は縦の線といえるでしょう。

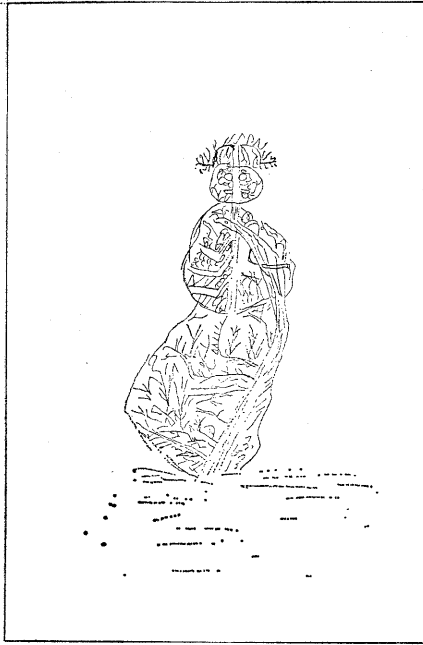


写真 10

フロイトは、自分の幼少期にあったことのある期間忘れていて、それがある期間のうちにでてくるというような歴史的な考え方をします。それに対して、メルロポンティは、現在の時点に立って、身体の中の感覚から、上方の意識のレベルまでの縦の線を考えます。上方の意識のレベルから次第に自分の中にずうっとさがつてくると、そこで

では明瞭な意味はわからないけれどもなにかひじょうに深いところにある身体感覚がある。そこから想像（イメージネーション）が出てくる。これがメルロポンティのいうボディアイ

（身体の眼）で、からだのもっている理解の仕方です。つまり頭で理解する仕方、とそういうのはっきりした言葉で明瞭に表現できない、からだの中の目とでもいうようなところから、理解する仕方がある。その身体の中からの理解の仕方が上のほうに昇ってくるとそれがイメージです。次の例にいく前に、ごく簡単にメルロポンティについて説明をしたわけです。

写真10を見て下さい。これは十五歳の女児の樹木の絵です。彼女は学校の勉強に集中することができない。この絵も夢みるような様子で描かれています。この樹木は明かに人間の女性を描いています。この絵を理解するのにエリクソンの理論を引き合いにだしたいと思います。エリクソンによれば全ての年齢において、それぞれ前行（プログレッション）と退行（レグレッション）があります。青年期の段階では社会の中にはいっていき、社会をうけいれ、社会を自

分の中に統合していくという方向と、それから自分の変化する身体を自分自身の中に統合していく方向とがあります。この絵を描いた十五歳の少女は女性的なからだに急激に成長していきました。しかしこの娘は自分の変化していく身体を自分の中に統合することができない。自分の父親のように立派な社会人になろうという方向に自分をあわせていくことはできるが、自分の身体の変化のほうに自分をあわせていくことができない。エリクソンによればこの娘は、自分のからだに同一化することができなくて、自分自身に対して明確な認識をもつことができず、こういう絵を描くと考えられます。この絵の中にもう十分にこの子どもの言いたいことが含まれています。ですから私はこの娘に対して、直接にどう考えているかといったことを訊くことは全くしなかったし、またしようとも思いませんでした。この絵それ自身がそれを語っていると

思います。ただ私は両親と話をしました。ここには、まだ自分で明確な意識にのぼらせて考える以前のことがらがあります。この絵の中には、心理的な感情が全てこめられています。この中にこの子どもの退行（レグレッション）は押し込められていて行動のおもてに表現されていません。このところでのこの子は自分の女性としての身体の発達の問題をのり越えなければならぬのだが、このところを両親に説明することはひじょうにむずかしい。メルロポンテイにもどれば、これがからだの中のほうにはいつてきた退行（レグレッション）であって、これを日常の言語で説明しようとしても、もともと合理的表現をこえたものですから、簡単なことではない。この絵を両親に見せて私の考えを話すのにも、エリクソンやメルロポンテイをひきあいにはだすわけではなくて、ここにあるこれを見て、この中にこの子どもが表現しているものを話

すわけです。この場合には、両親はひじょうにおどろいたわけですが、これを親が理解しても、次に子どもの毎日の生活の中で親としての振舞い方を考えていくことはなかなか容易なことではありません。私どもは子どもをIQや心理テストの平均値との比較の上で子どもを理解することができません。しかし、私どもは子どもを、一人の内面をもった人間として理解しようとしています。これは私ども自身のアナロギーにおいて可能になります。子どもは私どもにとって他人だから、本当には理解できないという考え方もあります。けれども子どもは決して閉ざされた存在ではないし、我々おとなも閉ざされた存在ではありません。相互主観的に合致するものがあります。絵であろうとあるいは遊びであろうといるいるなところに子ども自身は表現されますが、その表現されたものを合理的な方法で現実の中でとらえるだけでは

理解にはならないでしょう。表現されたものはその子ども自身の非合理的なものから由来するので、そこで非合理的な世界での理解ができないと共通の理解にならない。これがつまり想像(イマジネーション)です。

これはバシュユールの示そうと思つていると同じ世界です。バシュユールはもとも科学哲学の人で化学者です。彼は言葉にてでくる以前の世界を詩を通して——詩を分解し、また観賞し、それを通して示そうとした、詩の哲学の人です。

彼は火と水と風と土とギリシヤ哲学の四つの要素をとりあげて「火の精神分析」「水と夢」「空と夢」「大地と休息の夢想」「大地と意志の夢想」等、膨大な書物を著わしています。読まれるとおもしろいでしょう。このような現象学的研究で目指しているものは、一般化ではなくて、本質を示そうとすることです。相互主観性の中で我々の知ることができるのは一般的なものではなく

て、本質を知ることです。バシュユールがそこで示そうとしたものも本質であつて、それは言葉になる以前の世界と関連するのです。われわれは、ことばをもつ前に、物質を感じ、触れ、見ることに、想像が生れます。想像(イマジネーション)は開かれた、相互に理解可能な世界であつて、しかも合理的な方法によらない理解可能な世界であります。

これで私の話は終わりますが、どうぞ何でも質問して下さい。

質問 先生のいわれる想像というのは、本を読んで勉強することによって得られる知識とは違うように思われますが、どうするところになるのでしょうか。
フェルメール 想像(イマジネーション)というのは、あまり勤勉になりすぎるとわ

からない世界です。勤勉な状態というのは、何かの目的に向つている行為ですから、勤勉に仕事をしているときには、目的しかみえていない。想像はそれとは逆の方向であつて、一つの方向に熱心になりすぎると、想像の世界は見えなくなつてしまいます。

質問 日本では現象学的な考え方は、学問の世界で地位が認められていないと思ふんですけれども、ヨーロッパではもつと認められているのですか。

フェルメール ひじょうにおもしろい質問だと思ひます。私がユトレヒト大学で学んだ頃は心理学的雰囲気があり、フロイトやユングの精神分析や実存哲学がさかんでした。ところがそのうち行動主義(ビヘイビアリズム)がアメリカからはいつてきてそれが心理学界を風びし、想像の世界そのものを否定するくらい一掃することになつたわけです。それには理由がないわけでは

ありません。偉大な思索家、ハイデッガー、メルロポンティ、サルトルなど、そういう人たちは繊細な言葉で、詳細に、表現しようとしたのだけでも、そのあとに続く人は言葉をもたないで、ただひじょうに主観的な感覚だけで向っていったから、そこに行動主義が入ってきて太刀打ちがでなくなつたということもあります。行動主義の人々が客観的行動をとりあげ、テストをし、こういう観察をすればこういう証明ができる、その相互関係はどうだということを示したときに、想像の世界は無視されてしまつたのです。

しかし最近では、今度は逆に若い人たちがこういう機械的な現代社会に飽きたらないうで、それで行動主義をむしろ批判してもう一度想像の世界を回復しようとする動きが顕著だと思ひます。

司会者 私は行動主義的研究にはそれなりのメリットがあると思ひますが、今日お

話し頂いた現象学的研究の仕方は、それは全く違つて、大変面白いと思ひます。これは、さっき言われたように、あまり勤勉になると、子どもの世界そのものに直にふれることができなくなつてしまひます。皆さんのように勤勉な人たちには、かえつてむずかしい課題かもしれませぬ。「想像」の世界に直接ふれるということは、保育の実際では、常にやつてきたことですが、それのみなく、これからの児童研究に欠かせない課題であると思ひます。そこでとらえたものを、言語で表現してゆく作業は、さきほども言われたように、学学として重要になるわけで、ここになると、皆さんの勤勉さが役に立つことになるでしよう。今日は、フェルメール先生から直接に話を伺うことができてよかつたと思ひます。ありがとうございます。(了)

* * *

幼児の教育 第七十七巻第一号

一月号 ◎ 定価二二〇円

昭和五十二年十二月二十五日 印刷

昭和五十三年 一月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。